

源氏物語

夕霧一

紫式部

青空文庫

つま戸より清き男の出づるころ後夜の
 律師のまう上るころ
 (晶子)

一人の夫人の忠実な良人りょうじんという評判があつて、品行方正を標榜ひょうぼうしていた源左大将であつたが、今は女二にょにの宮みやに心を惹ひかれる人になつて、世間体は故人への友情を忘れないふうに作りながら、引き続いて一条てい第だいをお訪たずねすることをしていた。しかもこの状態から一步を進めないではおかない覚悟が月日とともに堅くなつていった。一条の御息所みやすどころも珍しい至誠の人であると、近ごろになつてますます来訪者が少なく、寂さびれてゆく邸やしきへしばしば足を運ぶ大将によつて慰められていることが多いのであつた。初めから求婚者として現われなかつた自分が、急に変わった態度に出るのはきまりが悪い、ただ真心で尽くしているところをお認めになつたなら、自然に宮のお心は自分へ向いてくるに違いないから時を待とうと、こう大将は思つて一日も早く宮と御接近する機会を得たいとうかがい歩いてるのである。宮が御自身でお話をあそばすようなことはまだ絶対でない。いつか好機会をとらえて自分の持つ熱情を直接にお告げすることもし、御様子もよく見たいと大将は心

に願つていた。

御息所は物怪もののけで重く煩わずらつて小野という叡山えいざんの麓ふもとへ近い村にある別荘へ病床を移すようになつた。以前から祈禱きとうを頼みつけていて、物怪を追い払うのに得意な律師が叡山の寺にこもつていて、京へは当分出ない誓いを御仏みほとけにしたというのを招くのに都合がよかつたからである。その日の幾つかの車とか前駆の人たちとかは皆大将からよこされた。かえつて柏木かしわぎの弟たちなどは自身のせわしさに紛れてか、そうした気はつかないふうであつた。左大将は兄の未亡人の宮を得たい心でそれとなく申し込んだ時に、もつてのほかであるというような強い拒絶的な態度をとられて以来、羞恥心しゆううちから出入りもしなくなつていたのである。それに比べて大将は非常に上手じょうずな方法をとつたものといわねばならない。

修法をさせていると聞いて大将は僧たちへ出す布施や浄衣の類までも細かに気をつけて山荘へ贈つたのであつた。その際病人の御息所は返事を書くべくもない容体であつたし、女房から挨拶あいさつ書きなどを出しておいては、先方の好意が徹底しなかつたもののおようか思いになるであらうし、宮様がお高ぶりになりすぎるともお思われになるであらうか。らと女房らがお願ひしたために、宮が引き受けて礼状をお書きになつた。美しい字のおおような短いお手紙ではあるが、なつかしい味のあるものであつたから、いよいよ大将の心

は傾いて、それ以後たびたびお手紙を差し上げるようになった。結局自分の疑いは疑いでなくなつてゆきそうであると、雲井くもいの雁夫人かりが早くも観察していることにはばかられて、大將は小野の山莊を訪ねたく思いながらも実行をしかねていた。

八月の二十日ごろで、野のながめも面白いころなのであるから、山莊住まいをしておいでになる恋人を大將はお訪ねしたい心がしきりに動いて、

「珍しく山から下つていられる某律師にぜひ逢あつて相談をしなければならぬことがあつたし、御病氣の御息所の別莊へお見舞いもしがてらに小野へ行こうと思う」

と何げなく言つて大將は邸やしきを出た。前駆もたいそうにはせず親しい者五、六人を狩衣かりぎぬ姿にさせて大將は伴つたのである。たいして山深くはいる所ではないが、松が崎さきの峰の色なども奥山ではないが、紅葉もみじをしていて、技巧を尽くした都の貴族の庭園などよりも美しい秋を見せていた。そこは簡単な小柴垣こしばがきなども雅致のあるふうにめぐらせて、仮居ではあるが品よく住みなされた山莊であつた。寝殿ともいふべき中央の建物の東の座敷のほうに祈祷の壇はできていて、北側の座敷が御息所の病室となつてゐるために、西向きの座敷に宮はおいでになつた。物怪を恐れて御息所は宮を京の邸へおとどめしておこうとしたのであるが、どうしてもいっしょにいたいとおいでになつた宮を、物怪のほかへ散る

のを恐れて少しの隔てではあるが病室へはお近づけ申し上げないのである。客を通す座敷がないために、宮のおいでになる室とは御簾みすで隔てになった西の縁側についた座敷へ大将を入れて、上級の女房らしい人たちが御息所との話の取り次ぎに出て来た。

「まことにもつたいなく存じます。御親切にたびたびお尋ねくださいました上に、御自身でまたお見舞いくださいますあなた様に対して、もう亡なくなってしまいましたれば自分でお礼を申し上げることができないと考えますことで、もう少し生きようといたします努力をしますことになりました」

これが御息所からの挨拶あいさつである。

「こちらへお移りになります日に、私もお送りをさせていただきたかったです、あやにく六条院の御用の残ったものがありましたものですから失礼をいたしました。その以後も何かと忙しいことがあったものですから、お案じいたしております心だけのことのできておらないのを、不本意に心苦しく存じております」

などと大将は取り次がせている。奥のほうに静かにして宮はおいでになるのであるが、簡単な山荘のことであるから、奥といっても深いことはないものであって、若い内親王様がそこにおいでになる気配けはいはよく大将にわかるのである。柔らかに身じろぎなどをあそばす

衣擦れの音によつて、宮のおすわりになつたあたりが想像された。魂はそこへ行つてしまつたようなうつろな氣になりながら、御息所の病室とここを通う取り次ぎの女房の往復の暇どる間を、これまでから話し相手にする少将とかそのほかの宮の女房とかを相手にして大将は語つていたのであつた。

「宮様のほうへ伺うようになりましてから、もう何年と年で数えなければならぬほどになりますよ、まだきわめてよそよそしいお取り扱ひを受けておりますことで、恨めしい氣がしますよ。こうした御簾の前で、人づてのお言葉をほのかに承りうるだけではありませんか。私はまだこんな冷たい御待遇というものを知りませんよ。どんなに古風な氣のきかない男に皆さんは私を思つておられるだろうと恥ずかしく思います。青年で氣樂な位置におりましたところから、続いて恋愛を生活の一部にして来ていますれば、こんなに不器用な恋の悩みをしないでも済んだらうと思ひます。私のように長く心の病氣をおさえている人はないでしょう」

大将はこの言葉のとおりにもう軽々しい多情多感な青年ではない重々しい風采を備えているのであるから、その人の切り出して言つたことがこれであることを、女房たちはこんなことになるかともかねてあやぶんでいたと、途方に暮れた氣がするのであつた。

「私が拙い御挨拶などをしてはかえっていけませんから、あなたが」

こんなことを皆ひそかに言い合っていて、

「あんなにもお言いになります方に、あまり無関心らしくあそばさないほうがよろしゅうございましょう。何とかおつしやつてくださいます」

と宮へ申し上げると、

「病人が自身でお話を申し上げることのできませんような失礼な際に、私でも代わりをいたしましてお逢い申し上げたいのでございますが、病人が一時非常に悪うございましたために、私までも健康を害しまして、それでよんどころなく」

こうお取り次がせになった。

「それは宮様のお言葉ですか」

と大将は居ずまいを正した。

「御息所の御容体を、私自身の病などと比較にもなりませんほどお案じいたしておりますのも何の理由からでございますよう。もつたない話ではございますが、御憂鬱な御気分が朗らかになれますまで、あの方様が御健康でおいでくださいますことは願わしいことだと存じ上げるからでございます。あの方様へお尽くしいただけのものとして、私の

あなた様へ持ちます真心をお認めくださいませんことはお恨めしいことでございます」
と大将は言う。

「ごもつともでございます」

と女房らが言う。

日は落ちて行く刻で、空も身にしむ色に霧が包んでいて、山の蔭かげはもう小暗おくらい気のある庭にはしきりに蝸ひぐらしが鳴き、垣根かきねの撫なでしこ子が風に動く色も趣多く見えた。植え込みの灌木かんぼくや草の花が乱れほうだいになった中を行く水の音がかすかに涼しい。一方では凄すげいほどに山おろしが松の梢こずえを鳴らしていたりなどして、不断経の僧の交替の時間が来て鐘を打つと、終わって立つ僧の唱える声と、新しい手代わりの僧の声とがいつしよになって、一時に高く経声の起こるのも尊い感じのすることであった。所が所だけにすべてのことが人に心細さを思わせるのであったから、恋する大将の物思わしさはつるばかりであった。帰る気などには少しもなれない。律師が加持をする音がして、陀羅尼経だらにを誦さびた声で読み出した。御息所の病苦が加わったふうであると言つて、女房たちはおおかたそのほうへ行つていて、もとから療養の場所ですべて来ておいでになるのでない女房が、宮のおそばに侍しているのは少なく、宮は寂しく物思いをあそばされるふうであった。非常に静かなこん

な時に自分の心もお告げすべきであると大将が思っていると、外では霧が軒にまで迫ってきた。

「私の帰る道も見えなくなつてゆきますようなこんな時に、どうすればいいのでしょうか」と大将は言つて、

山里の哀れを添ふる夕霧に立ち出でんいそらもなきこちして

と申し上げると、

山がつの籬まがきをこめて立つ霧も心空なる人はとどめず

こうほのかにお答えになる優美な宮の御様子うがうれしく思われて、大将はいよいよ帰ることを忘れてしまった。

「どうすることもできません。道はわからなくなつてしまいましたし、こちらはお追い立てになる。だれも経験することを少しも経験せずに始めようとする者は、すぐこうした目

にあいます」

などと言つて、もうここに落ち着くふうを見せ、忍び余る心もほのめかしてお話する大将を、宮は今までからもその気持ちを全然お知りにならないのでもなかつたが、気づかぬふうをしておいになつたのを、あらわに言葉にして言うのをお聞きになつては、ただ困つたこととお思われになつて、いつそうものを多くお言いにならぬことになつたのを、大将は歎息たんそくして、心の中ではこんな機会はまたとあるわけもない、思い切つたことは今でなければ実行が不可能になろうとみずからを励ましていた。同情のない軽率な人間であると思われしてもしかたがない、せめて長く秘めてきた苦しい思いだけでもおささやきしたいと思つた大将は、従者を呼ぶと、もとは右近衛府うこんえふの将監しょうげんであつて、五位になつた男が出て来た。大将は近く招いて、

「こちらへ来ておられる律師にぜひ逢つて話すことがあるのだが、御病人の護身の法などをしておられて疲れておられる律師は休息もしなければならぬことと思うから、私はこちらで泊まつて、初夜のお勤めを終わられたところに律師のいるほうへ行こうと思う。二、三人だけはこの山荘のほうへ人を残しておいて、そのほか隨身などの者は栗栖野くるすのの荘しやうが近いはずだから、そのほうへ皆やつて、馬に糧秣まぐさをやつたりさせることにして、ここで騒が

しく人声などは立てさせぬようにしてくれ。こんな外泊は人の中傷の種になるのだから氣をつけてくれるように」

と命じた。訳のあることに相違ないと思つてその男は去つた。それから大将は女房に、「道もわからなくなりましたからここでござつつかいになりましたよう、かないますならこの御簾みすの前を拝借させてください。阿闍梨あじやりの御用が済むまでです」

と落ち着いたふうで言うのであつた。これまではこんな長居をしたこともなく、浮薄な言葉も出した人ではなかつたのに、困つたことであると宮はお思いになつたが、わざとがましく隣室へ行つてしまうことも体裁のよいものでないような氣があそばされるので、ただ音をたてぬようにしてそのままおいでになると、思つたことを吐露し始めた大将は、お心の動くまでというように、いろいろと言葉を尽くすのであつたが、宮へお取り次ぎにいざり入る人の後ろからそつと御簾をくぐつて来た。夕霧が盛んに家の中へ流れ込むころで、座敷の中が暗くなつていたのである。その女房は驚いて後ろを見返つたが、宮は恐ろしくおなりになつて、北側の襖からかみ子の外へいざつて出ようとあそばされたのを、大将は巧みに追いついて手でお引きとめした。もうお身体からだは隣の間へはいつていたのであるが、お召し物の裾すそがまだこちらに引かれていたのである。襖子は隣の室の外から鍵かぎのかかるよう

にはなっていないために、それをおしめになつたままで、水のように宮は慄ふるえておいでになつた。女房たちも呆然ぼうぜんとしていていかにすべきであるかを知らない。こちらの室には鍵があつても、この場合をどうすればよいかに皆当惑したのである。無理やりに荒々しく手を宮のお召し物から引き放させるようなこともできる相手ではなかつた。

「御尊敬申し上げておりますあなた様がこんなことをなさいますとは思ひもよらぬことでございます」

と言つて、泣かんばかりに退去を頼むのであるが、

「これほどの近きでお話を申し上げようとすることを、なぜあなたがたは不思議になさるのでしょうか。つまり私ですが、真心をお見せすることになつて長い年月も重なつているはずです」

と女房らに答えてから、大将は優美な落ち着きを失わずに、美しいこの恋を成り立たせなければならぬことを宮へお説きするのであつた。宮は御同意をあそばすべくもない。こんな侮辱までも忍ばねばならぬかというお気持ちばかりが湧わき上がるのであるから何を言うこともおできにならない。

「あまりに少女おとめらしいではありませんか。思い余る心から、しいてここまで参つてしまつ

たことは失礼に違いございませんが、これ以上のことをお許しがなくてしようとは存じておりません。この恋に私はどれだけ煩悶はんもんに煩悶を重ねてきたでしょう。私が隠しておりまして自然お目にとまっているはずなのですが、しいて冷たくお扱いになるものですか、私としてはこのほかにいたしようがないではございませんか。思いやりのない行動として御反感をお招きしても、片思いの苦しきだけは聞いていただきたく思います。それだけです。御冷淡な御様子はお恨めしく思いますが、もったいないあなた様なので、決して、決して」

と言つて、大将はしいて同情深いふうを見せていた。あるところまでよりしまらぬ襖からか子を宮がおさえておいでになるのは、これほど薄弱な防禦ぼうぎよもないわけなのであるが、それをしいてあげようとも大将はしないのである。

「これだけで私の熱情が拒めると思召おほしめすのが気の毒ですよ」

と笑つていたが、やがておそばへ近づいた。しかも御意志を尊重して無理はあえてできない大将であつた。宮はなつかしい、柔らかみのある、貴女きじよらしい艶えんなところを十分に備えておいでになつた。続いてあそばされたお物思いのせいかほっそりと痩やせておいでになるのが、お召し物越しに接触している大将によく感ぜられるのである。しめやかな薫香くんこう

の匂いにおに深く包まれておいでになることも、柔らかに大将の官能を刺激しげきする、きわめて上品な可憐かれんさのある方であつた。

吹く風が人を心細くさせる山の夜ふけになり、虫の声も鹿しかの啼なくのも滝の音も入り混じつて艶えんな気分をつくるのであるから、ただあさはかな人間でも秋の哀れ、山の哀れに目をさまして身にしむ思いを知るであろうと思われる山荘に、格子もおろさぬままで落ち方になつた月のさし入る光も大将の心に悲しみを覚えさせた。

「まだ私の心持ちを御理解くださらないのを拝見しますと、私はかえつてあなた様に失望いたしますよ。こんなにかしいまでに自己を抑制することのできる男はほかにないだろうと思うのですが、御信用くださらないのですか。何をいたしても責任感を持たぬ種類の男には、私のようなのをばかな態度だとして、直ちに同情もなく力で解決をはかつてしまふのです。あまりに私の恋の価値を軽く御覧になりますから、知らず知らず私も危険性がはぐくまれてゆく気がいたします。男性とはどんなものを過去にまだご存じでなかつたあなた様でもないでしょう」

こう責められておいでになる宮は、どう返辞をしてよいかと苦しく思つておいでになる。もう処女でないからということ言葉をほのめかされるのを残念に宮はお思ひになつた。

薄命とは自分のような女性をいうのであろうともお悲しまれになって、大将のいどんで来るのを死ぬほど苦しく思召された。

「私のこれまでの運命はどんなにまづいものでございまして、それだからといって、これを肯定しなければならぬとは思われない」

と、ほのかに可憐な泣き声をお立てになって、

われのみや浮き世を知れるためしにて濡れ添ふ袖そでの名を朽くたすべき

ほかへお言いになるともなくお言いになったのを、大将がさらに自身の口にのせて歌うのさえ宮は苦痛にお思いになった。

「誤解をお受けしやすいようなことを私が申したものですから」

などと言つて、微笑するふうで、

「おほかたはわが濡れ衣をきせずとも朽ちにし袖の名やは隠るる

もうしかたがないと思召してくださいらどうですか」

こう言つて、月の光のあるほうへいつしよに出ようと大将はお勧めするのであるが、宮はじつと冷淡にしておいでのなるのを、大将はぞうきなくお引き寄せして、

「安価な恋愛でなく、最も高い清い恋をする私であることをお認めになつて、御安心なすつてください。お許しなしに決して、無謀なことはいたしません」

こうきつぱりとしたことを大将が言つているうちに明け方に近くもなつた。澄み切つた月の、霧にも紛れぬ光がさし込んできた。短い底ひさしの山荘の軒は空をたくさんに座敷へ入れて、月の顔と向かい合つているようなのが恥えんずかしくて、その光から隠れるように紛らしておいでになる宮の御様子が非常に艶えんであつた。故人の話も少ししだして、閑雅な態度で大将は語つていたのであつた。しかもその中で故人に対してよりも劣つたお取り扱いを恨めしがつた。宮のお心の中でも、故人はこの人に比べて低い地位にいた人であるが、院みやも御息所みやすどころも御同意のもとでお嫁とつがせになつて自分はその人の妻になつたのである、その良お人すら自分に対していただいていた愛はいささかなものであつた、ましてこうしてあるまじい恋に墮おちては、しかも知らぬ中でなく、故人の妹を妻に持つこの人との名が立つては、太政大臣家ではどう自分を不快に思うことであろう、世間で譏そしられることも想像されるが、

それよりも院がお聞きになつてどう思召すであろう、必ずお悲しみあそばすであろうなどと、切り離すことのできぬ関係の所々のことをお考えになると、このことが非常に情けなくお思われになつて、自分はやましいところもなく、大将の情人では断じてなくとも噂うわさはどんなふうになつて立てられることか、御息所が少しも関与しておいでにならぬことが子として罪であるように思召され、こんなことをあとでお聞きになり、幼稚な心からときがたい誤解の原因を作つたとお言いにならうこともわびしく御想像あそばされる宮は、

「せめて朝までおいでにならずにお帰りなさい」

と大将をお促しになるよりほかのことはおできにならないのである。

「悲しいことです。恋の成り立つた人のように分けて出なければならぬ草葉の露に對してすら私は恥ずかしいではありませんか。ではお言葉どおりにいたしますから、私の誠意だけはおくみとりください。馬鹿正直に仰せどおりにして帰ります私に、若し、上手じょうずに追いやつてしまったのだというふうを今後お見せになることがありましたなら、その時にはもう自製の力をなくして情熱のなすがままに自分をまかせなければならぬことと思ひますよ」

大将は心残りを多く覚えるのであるが、放縦な男のような行為は、言っているごとく過

去にも経験したことがなく、またできない人であつて、恋人の宮のためにもおかわいそうなことであり、自分自身の思い出にも不快さの残ることであらうなどと思つて、自他のために人目を避ける必要を感じ、深い霧に隠れて去つて行こうとしたが、魂がもはや空虚になつたような気持ちであつた。

「萩原はきはらや軒端のきばの露にそぼちつつ八重立つ霧を分けぞ行くべき

あなたも濡衣ぬれぎぬをお乾ほしになれないでしょう。それも無情に私をお追いになつた報いとお思ひになるほかはないでしょう」

と大将が言つた。そのとおりである。名はどうしても立つてあらうが、自分自身をせめてやましくないものにしておきたいと思召す心から、宮は冷ややかな態度をお示しになつて、

「わけ行かん草葉の露をかごとにてなほ濡衣をかけんとや思ふ

ひどい目には私をおあわせになるのですね」

と批難をあそばすのが、非常に美しいことにも、貴女らしいふうにもお見えになった。

今まで古い情誼じょうぎを忘れない親切な男になりすまして、好意を見せ続けて来た態度を一変して好色漢になつてしまうことが宮にお氣の毒でもあり、自身にも恥ずかしいと、大将は心に燃え上がるものをおさえていたが、またあまり過ぎた謙抑けんよくは取り返しのかぬ後悔を招くことではないかともいろいろに煩悶はんもんをしながら帰つて行くのであった。深い山里の朝露は冷たかつた。夫人がこの濡れ姿を見とがめることを恐れて大将は家へは帰らずに六条院の東の花散里はなちるさと夫人の住居すまいへ行つた。まだ朝霧は晴れなかつた。町でもこんなのであるから、小野の山荘の人はどんなに寂しい霧を眺めておいでになるであろうと大将は思ひやつた。

「珍しくお忍び歩きをなさいましたのですよ」

と女房たちはささやいていた。

夕霧の大将はしばらく休息をしてから衣服を脱ぎかえた。平生からこの人の夏物、冬物を幾襲かさねとなく作つて用意してある養母であつたから、香の唐櫃からびつからすぐに品々が選び出されたのである。朝の粥かゆを食べたりしたあとで夫人の居間へ夕霧ははいつて行つた。夕霧

はそこから小野へ手紙をお送りした。

山莊の宮は予想もあそばさなかつた、にわかな変わった態度を男のとり出した昨夜のことで、無礼なども、恥を見せたともお思ひになることで夕霧への御反感が強かつた。御息所の耳へはいることがあつたならと羞恥しゆうちをお覚えになるのであるが、またそんなことがあつたとは少しも御息所が知らずにいて、不意に何かのことから氣のついた時に、隔て心があるように思われるのも苦しい、女房があらひのままを話すことによつて母を悲しませることがあつてもやむをえないと宮はおあきらめになるよりほかはなかつた。親子と申してもこれほど親しみ合う仲は少ない母と御子なのである。世間に噂の立っていることも親にはなお秘密にしておくことがよく昔の小説などにはあるが、宮にそれはおできになれないことであつた。女房たちは昨夜のゆうべことを御息所が片端だけ聞いてもほんとうにあやまちが起こつたことのように歎かれるのであろうから、今はまだそうした思ひをさせる必要はないと相談をしていながらも、まだどの程度の關係にまで進んだのか進まなかつたのかに疑問を持つていて、今来た大将の手紙が真相を説明してくれるであらうと思ふ好奇心から、宮がお読みになる時に盗み見をしたいと願つているのであるが、宮はお開きにならうともあそばされないのに氣を揉もんで、

「全然御返事をあそばさないことも、たよりない御性質のように想像をなさることもございましょうし、お若々し過ぎることでもございます」

などと云つて、大将の手紙をひろ拡げると、

「思いがけないことで、たとえあれだけのことにせよ男の人を接近させたことは、皆私自身の軽率から起こした過失だとは思ふがね、思いやりのないことをした人を、私の憎む心がまだ直らないのだから、読まなかつたと言つてやるがいい」

と不機嫌ふきげんに仰せられて宮は横になつておしまひになつた。夕霧の手紙は宮の御迷惑になるようなことを避けて書かれたものであつた。

たましひをつれなき袖にとどめおきてわが心から惑はるるかな

「ほかなるものは」（身を捨てていにやしにけん思ふよりほかなるものは心なりけり）と歌われておりますから、昔もすでに私ほど苦しんだ人があつたと思ひまして、みずからを慰めようとはいたすにもかかわらずなお魂は身に添いません。

こんなことが長く書かれてあるようであつたが、女房も細かに読むことは遠慮されてで

きないのである。事の成り立つたのちに書かれた文ふみではないようであるとは見ながらも、なお疑いを消してはいなかった。女房たちは宮の御気分のすぐれぬことを歎なげきながら、

「昨晚のことがまだ不可解なことに思われます。非常に御親切だということとは長い間に私どももお認めしている方ですけれど、良人おっとという御関係におなりになった時と、熱のある友情期間とが同じでありうるでしょうか心配ですよ」

などと言い、親しく宮にお仕えしている女房たちもこのことに重い関心をもって宮のためにお案じ申し上げているのであった。御息所はまだこのことを少しも知らずにいた。

物怪に煩っている病人は重態に見えるかと思うと、またたちまちに軽快らしくなることもあつて、平常に近い気分になつていたこの日の昼ごろに、日中の加持が終わり、律師一人だけが病床に近くいて陀羅尼經だらにを讀んでいた。病人の苦痛のやや去つたことを律師は喜んで、祈りの終わりに、

「大日如来が嘘うそを仰せられたのでなければ、私が熱誠をこめて行なう修法に効果の見えぬわけはありません。悪霊は執拗しつようであっても、それは業ごうにまとわれたつまらぬ亡者もうじゃではありませんか」

と太い枯れ声で言っていた。俗離れのした強い性格の律師で、突然、

「あ、左大将はいつごろから宮様の所へ通つて来ておいでになりますかと問うた。」

「そんなことはありません、亡なくなられた大納言の親友でしたから、あの方が遺言して宮様のことも頼んでお置きになったものですから、その約束をお守りになって、それ以来親切によく訪ねて来てくださることが、もう何年も続いています。そんなお交際つきあいの仲なのですが、この遠い所まで私の病氣を見舞いに来てくださいましたそうですから、恐縮して私は聞いておりましたよ」

御息所みやすどころの答えはこうであつた。

「とんでもない。私に隠しだてをなさる必要はない。今朝けさごや後夜の勤めにこちらへ参つた時に、あちらの西の妻戸からりっぱな若い方が出ておいでになったのを、霧が深く私にはよく顔が見えませんが、弟子でしどもは左大将が帰つて行かれるのじゃ、昨夜ゆうべも車をお返しになつてお泊まりになつたのを見たとき口々に言つておりました。そうだろうと私もうなずかれました。よい匂いにおのする方じやからな。しかしこの御関係は結構なことじやありませんなあ。あちらがりっぱな方であることに異議はないが、しかしどうも賛成ができません。子供でいられたころからあの方の御祈祷きとうは御祖母の宮様から私が命ぜられていたもの

じゃから、今も何かとっては私に頼まれるのですがな、そのことはよくありませんな。奥さんの勢力が強くてしかたがない。盛んな一族が背景になっていきますからな。お子さんはもう七、八人もできています。こちらの宮様がそれにお勝ちになることはできません。いでしょうな。また一方から言えば女という罪障の深いものに生まれて、救いのない長夜の闇に迷うのもこうした関係から生じる煩悩が原因になり、恐ろしい報いを受けることになりますからな、長い絆が付きまとわることですからな、絶対によろしくないことじゃ」

　　「律師は頭を振り立てながら、興奮して乱暴なことも言うのである。

「私には腑に落ちないことですよ。そんな様子などは少しもお見せにならなかつた方ですもの、昨日は私があまり苦しんでいたものですから、しばらく休息をしてからまた話そうとお言いになつて、あちらにいらつしやると女房たちは言っていました、そんなふうで夜明けまでおいでになつたのでしよう。至極まじめな堅い方をそんなふうにする人があるのはよくありません」

　　と御息所はなお不審をいなくふうを僧に見せながらも、心のうちではそんなことがあつたのかもしれない、宮を恋しくお思いする様子はおりおり見えたが、りっぱな人格のある人は人の批難の種になるようなことは避けて、まじめな友情だけを見せていたために、危

険はないものとして自分は油断をしていたが、おそばに人も少ないのを見てお居間へはい
るようなこともしたのではないかと思われもした。律師が立って行ったあとで、小少将を
呼んで、こうこうしたことを聞いたとまず御息所は言った。

「ほんとうのことはどれほどのことだったのかね。なぜ私にくわしく報告してくれなかつ
たの。人の言うようなことは決してあるまいとは思っていても私の心は不安でならない」
聞く御息所に気の毒な思いをしながらも、小少将は昨日のことを初めからくわしく話し
た。今朝の手紙の内容、宮がその時にお洩らしになつた言葉なども言つて、

「ながくおさえ続けておいでになりました心を、お知らせなさろうというだけのことだつ
たかと存じます。宮様への敬意をお失いになるようなことはございませんで、御迷惑とお
考へになつて朝まではおいでになられませんが早く出てお行きになりましたのを、ほかの
人はどんなふうにし上げたのでしょうか」

と、律師とは知らずに、ほかに密告した女房があつたのだと小少将は思つて言った。御
息所は何も言わずに、残念そうな表情をしていたが涙がほろほろとこぼれ出した。見てい
て小少将は気の毒で、なぜありのままのことを言ったのだらう、病氣の上に御息所は煩
悶はんもんをして、どんなに堪えがたいことであらうと悔いた。

「襖からかみ子はしめたままでございました」

などと、今になって、少しでもよいように取りなそうと努めるのであったが、そんなことはどうでも、なぜそんなに近くへ男の寄つて来るようなことを宮がおさせになったかと思ふと悲しい。やましいところはおありにならなくても、さつき聞いたようなことを言つて騒いでいる律師の弟子たちは、宮様のためにこれは不利であると思つて隠すようなことをするはずもない、どう人に言いわけをすればいいことかわからない、絶対にないことと打ち消すことはしなければなるまい、何にしても心の幼稚な女房ばかりがお付きしていても思ふ心を御息所は口へ出しては言えなかつた。病気が重い上に大きい衝動を受けたのであつたからこの人はいたましいほどにも苦しんだ。神聖な方としてお守りも立てしていきつたかつた宮様も、世間の女並みに浮き名を立てられておしまいになることがもつてのほかに思われてならなかつた。

「今日のような私の気分の少しよい間に、宮様がこちらへおいでくださるように申し上げなさい。あちらへ伺うはずだけれど動けそうではないのだからね。ずいぶんながくお目にかからない気がする」

御息所は目に涙を浮かべてこう言っているのであつた。

小少将は宮のお居間へ帰って、御息所の最後の言葉だけをお伝えした。宮は母君の所へ行こうとあそびされて、額髪の涙でかたまつたのをお直しになり、お召し物の綻ほころんでいた単衣ひしえをお着かえになつても、お気が進まないでじつとすわつておいでになるのであつた。この女房たちもどう自分を見ているのであろう、御息所も今は何もお知りにならないで、あとで少しでも昨夜のことをお聞きになることがあつたなら、素知らぬ顔をしていたと今日の方が思われることであろうとお考えになると、非常に恥ずかしくおなりになり、宮はまた横になつておしまいになつて、

「私はどうも気分がよくない。このまま病氣になつて死んでしまうのはいいことだけれどね、脚あしからのぼせ上がつてきたようだから」

とお言いになり、宮は脚をお揉もませになつた。あまり物思いをあそぶすためにおのぼせになつたのである。

「御息所に昨晚のことをほのめかしてお話しした人があつたのでございますよ。ほんとうのことが聞きたいとお言いになるものでございますから、正直にお話しいたしましたがお襖からかみ子のことだけは少し誇張をいたしまして、しまいまで皆はあいたのではないように申し上げておきましたから、もしくはわしいお話を聞こうとなさいましたら、私と同じよう

におつしやつてくださいまし」

こう小少将が言った。御息所が悲しんでいることは申さない。宮はそれでお呼びになつたのであると、いつそう侘^{わび}しい気におなりになり、何も仰せられなかつたが、お枕^{まくら}から雫^{しずく}が落ちていた。この問題だけではなく、自分の意志でなくした結婚からこの方、母に物思^{ものし}いばかりをさせる自分であると、宮は子としてのかいのないことを悲しんでおいでになつて、あの大將もこのままで心をひるがえすことはせずに、いろいろと自分を苦しめるであらうことが煩^{わづ}わしい、それについて立つ噂^{うわさ}もあらうと御煩悶^{はんもん}をあそばした。弁明することのできない弱い女の自分は、無根のことでどんなに悪名をきせられることになるのであらうと、穢^{けが}れのない自信は持つておいでになるのであるが、皇女に生まれた者があれほど異性と近くいて夜の何時間かを過ごしたというようなことはありうることでなく、あつてよいわけのものでもないとお思いになることで、御自身の運命がお悲しまれになり、憂^{ゆう}鬱^{うつ}にされておいでになつたが、夕方にまた、

「ぜひおいでなさいますように」

と、御息所のほうから言つて来たので、間にある座敷倉の戸を、向こうとこちらと両方であけて宮は御息所の東の病室へおいでになつた。

病苦がありながらも御息所はうやうやしく宮をお取り扱ひした。平生の作法どおりに起き上がったもいた。

「だらしなくいたしているのでございますから、お迎えいたしますことも心が引けてなりません。ただ二、三日だけお目にかからなかつたのでございますのを、何年もお逢い^あすることのできなかつたほど寂しく思われますのも味気ないことでございます。親子の縁では未来で必然的にお逢いできますともきまらないのでございますからね。もう一度生まれてまいりましてもだめなのでございますのに、考えますれば瞬間で永遠の別れになりますわれわれがあまりに愛し過ぎて暮らしましたのが、後悔いたされます」

などと、御息所は泣くのであつた。宮もいろいろなことがお心にあつてお悲しい時で、何もお言いになることができずに、ただ母君の顔をながめておいでになつた。非常にお内気で思ふことをはきはきとお告げになることもおできにならずに、恥ずかしいお様子ばかりのお見えになるのがおかわいそうで、御息所は昨日のことをお尋ねすることもできない。灯^ひを早くつけさせてお夕食などもこちらで差し上げさせることに御息所はした。今朝から何も召し上がらないことを御息所は聞いて、ある物は自身で料理をし変えさせることを命じまでしてお勧めするのであるが、宮は御箸^{はし}をお触れになる気にもおなりになれなかつた。

ただ母君の容体がよさそうである点だけで少しの慰めを得ておいでになった。

夕霧の大将からまた手紙が来た。事情を知らない女房が使いから受け取って、

「大将さんから少将さんにといいお手紙がまいりました」

と、この座敷で披露ひろうしたことは、宮のお心をさらに苦しくさせたことであつた。少将はすぐにそれを手もとへ取つてしまった。

「どんなお手紙」

と、今までそのことに一言も触れなかつた御息所も問うた。反抗的になつていた御息所の心も、何時間かのうちに弱くなり、人知れず大将の今夜の来訪を待つていたのであるから、手紙が来るのは自身で来ぬことであろうと胸が騒いだのである。

「およこしになつた手紙のお返事はなさいまし、しかたがございません。一度立てた名を取り消すような評判はだれがしてくれましょう。きれいな御自信はおありになつても、だれがそれを認めてくれましょう。素直にお返事もあそばして、冷淡になさらないほうがよろしゅうございます。わがままな性格だと思われてはなりません」

と宮に申し上げて、御息所みやすどころは手紙を少将から受け取ろうとした。少将は心に当惑をしながらも渡すよりほかはなかつた。

冷ややかなお心を知りましたことによつてかえつておさえがたいものに私の恋はなつていきそうです。

せくからに浅くぞ見えん山河やまかはの流れての名をつつみはてずば

まだいろいろに書かれてある手紙であつたが、御息所は終わりまでを読まなかつた。この手紙も宮との関係を明瞭めいりように説明したものでなくて恋人の冷ややかであつたことにこゝうして酬むくいるというように、今夜も来ない大将の態度を御息所は悲しんだ。柏木かしわぎが宮にお持ちする愛情のこまやかでないのを知つた時に、御息所は悲観したものであるが、ただ一人の妻として形式的には鄭重ていちょうをきわめたお取り扱いを故人がしたこと、強みのあゝる気がして慰められはした。それでも心から御息所は宮が御幸福におなりになつたとは思わなかつた。それさえもそうであつたのに、今度のことは何たる悲しいことであろう。太政大臣家での取り沙汰ざたは想像するだにいやであると御息所は思うのである。なおどう大将が言つてくるかと思つたい心から、非常に苦しい身体からだの調子であるのを忍んで、目を無理にあけるようにもして書いた力のない、鳥の足跡のような字で返事をするのであつた。

もう私はなおる見込みもなくなりました。宮様はただ今こちらへ見舞いに来ておいでになるのでございまして、お勧めをしてみました。が、めいっただふうになっておいでになりまして、お返事もお書けにならないようございまして、私が見かねまして、

をみなへししを
女郎花萎るる野辺をいづくとて一夜ばかりの宿を借りけん

こう書きさしたただけで紙を巻いて出した。そのまままた病床に横たわった御息所はなはだしく苦しみました。物もののけ怪が油断をさせようと一時的に軽快ならしめていたのかと女房たちは騒ぎだした。効験のいちじるしい僧が皆呼び集められて、病室は混雑していた。あちらへお帰りになるように女房たちはお勧めするのであるが、宮は御自身をお悲しみになる心から、いっしょに死のうと思召して母君からお離れにならないのであった。

夕霧はこの日の昼ごろから三条の家にいた。今夜また小野の山荘へ行くことは、まだない事実をあることらしく人に思わせるだけで、自分のためにはよい結果をもたらすことではないと行きたい心をしておさえることに努力していたが、これまで恋しくお思っていたことは物の数でもないほどに昨日からにわかには千倍した恋に苦しむ大将であった。夫人

は山莊の昨日の訪問の様子をほかから聞き出して不快がつていたのであるが、知らぬ顔をして子供の相手をしながら自身の昼の居間のほうで横になっていた。

八時過ぎに小野の山莊で書いた御息所の返事は大将の所へ持つて来られたのであるが、大病人の書いた鳥の跡は一度見たのではわかりにくい。夕霧が灯ひを近くへ持つて来させてさらに丁寧ていねいに読もうとしている時に、あちらにいたのであるが夫人はそれを見つけて、そつと寄つて来て後ろから奪つてしまった。夕霧はあきれて、

「どうするのですか。けしからんじやありませんか。六条の東のお母様のお手紙ですよ。今朝から風邪かぜでお悪かつたから、院の御殿へ伺つたままでこちらへ歸つて来て、もう一度お訪たずねすることをしなかつたのがお気の毒だつたから、御様子を聞く手紙を持たせてやつたのじやありませんか。御覧なさい、恋の手紙というような書き方ですか、これは。はしたない下品なことをするじやありませんか。年月に添つて私を侮あなどることがひどくなるのは困つたものだ。女房たちがどう思ふかを少しも考慮に入れられないのですね」

と言つて歎たんそく息いきはしたが、惜しそうにしていて夫人の手から取り上げることとはしなかつたから、雲井くもいの雁夫人かりもさすがにこの場で読むこともできずにじつと持つていた。

「年月に添つて侮るなどは、あなた御自身がそうでいらつしやるから、私のことまでも

臆測おくそくなさるのよ」

夫人は良人おとこがあまりにまじめな顔をしているのに気おくれがして、若々しく甘えてみせた。夕霧は笑って、

「それはどちらのことでもいい。世間のどこにもあることだからね。けれどもこれだけはほかにないことですよ。相当な身分の男がただ一人の妻を愛して、何かに怖おそれている鷹たかのように、じつと一所を見守っているようなのに似た私を、どんなに人が笑っていることだろう。そんな偏屈な男に愛されていることはあなたにとつても名誉じやありませんよ。おぜいの妻さい妾しやうの中ですぐれて愛される人は、見ない人までもが尊敬を寄せるものだし、自分でも始終緊張していることができ、若々しい血はなくならないであろうし、眞の生きがいを感じることが多いだろうと思われる。私のように、昔の何かの小説にある老いぼれの良人のようにあなた一人をただ夢中に愛しているようなことはあなたのために結構なことではありませんよ。そんなことはあなたが世間からはなやかに見られることでは少しもないからね」

夕霧は小野の手紙をいざこざなしに取ってしまいたい心から妻を欺くと、夫人は派手はでに笑って、

「はなやかなことをあなたがしようとしていらつしやるから、古いじみな女の私が一方で苦しんでいるのですよ。にわかにつきりまじめでなくおなりになったのですもの、私にはそうした習慣がついていないのですから苦しくてなりません。初めからそうしておいでになればよかつたのよ」

と恨めしがる妻も憎くはなかつた。

「にわかにとあなたが思うようなことが私のどこにあるのですか、あなたは疑い深いのですね。私を中傷する人があるのでしよう。そうした人たちは初めから私に敵意を見せていたものだ。浅葱あさぎの色の位階服が軽蔑けいべつすべきであつた私を、今だつてあなたの良人にさせておくのが残念で、何かほかの考えを持つている者などがあつて、いろいろな噂うわさをあなたに聞かせるのだらう。一方で私のためにそうした濡衣ぬれぎぬを着せられておいでになる方もお気の毒なものだ」

などと言いながらも夕霧は、女二によにの宮みやの御良人となることも堅く期しているのであるから、深く弁明はしようとしないのであつた。乳母めのとの大輔たゆうは氣術きじゆつながつて何も言おうとしなかつた。なお夫人は奪つた手紙を返そうとはせずどこかへ隠してしまつた。夕霧は無理に取り返そうとはせず、冷静に見せて寝についたのであるが、動悸どうきばかり高く打つて

ならなかった。どうかして取り返したい、御息所の手紙らしい、どんな内容なのであろうと思うと眠ることもできないのである。夫人が寝入ってしまったので、宵よいにいた所の敷き物の下などをさりげなく大将は捜すのであるが見つからなかった。深く隠すだけの時間になかったのを思うと、近い所に置かれてあるに違いないと思うのに見つけられないのが歯がゆくて、悩ましい気持ちになり、夜が明けてもなお起きようとしなかった。夫人は子供に起こされて寢所からいざつて出る時に、夕霧も今日をさましたふうに半身を起こして、昨夜の手紙をまたも捜そうとするのであったが、見つけることは不可能であった。夫人は良人おとこがそんなふうにはしがらぬ手紙はやはり恋の消息ではなかったのであろうと思って、もう気にもかからなかった。子供がそばで騒ぎまわったり、やや大きい子が人形を作って遊んだり、本を読んだり、手習いをしたりするのをいちいち見てやらねばならぬ忙しい時にも、また一人の小さい子が後ろから這はいかかって来てつかまり立ちをしようとするような、母であるための繁忙に追われて、夫人はもう奪った手紙のことなどは忘れ切っていた。男は他のことはいつさい思われぬほど手紙がほしかった。小野へ今朝早く消息をしたいと思うのであるが、昨夜の手紙に書かれてあったことをよく見なかったのであるから、それに触れずに手紙を書いては、先方のものをそまつに取り扱って散らせてしまったことが

知れてまずいことになるかと煩悶をしていた。夫婦も子供たちも食事を済ませてのどかになった昼ごろに、大将は思いあまつて夫人に言うのであった。

「昨夜のお手紙には何と書いてあつたのですか。ばかなことを言つてあなたが見せてくれないものだから、今日もこれからお見舞いをしなければならぬのに困つてしまう。私は気分が悪くて今日は六条へも行きたくないから、手紙で言つてあげなければならぬのだが、昨日のことがわからないでは不都合だから」

夕霧の様子はきわめてさりげないものであつたから、手紙を隠した自身の所作が、むだなことをしたものであると思つたと、急に恥ずかしくなつたが、それは言わずに、

「先夜の山風に身体からだを悪くいたしましたからとお言いわけをなさればいいじゃありませんか」

と言つた。

「つまらんことばかり言うのですね。何もおもしろくないじゃありませんか。私が世間並みの男のように言われるのを聞くとかえつてきまりが悪くなりますよ。女房たちなども不思議な堅い男を疑うあなたを笑うだらうに」

冗談じょうだんにして、また、

「昨夜の手紙はどこ」

と言ったが、なおすぐに取り出そうとは夫人のしないままで、ほかの話などをしてしばらく寝ていたが、そのうちに日が暮れた。蝸の声に驚いて目をさました大将は、この時刻に山荘の庭を霧がどんなに深くふさいでいることであろう、情けないことである、今日のうちに昨日の手紙の返事をすら自分は送ることができなかつたのであると思つて、何でも無いふうすずりに硯の墨をすりながら、どんなふうたんそくに書いて送つたものであろうと歎息たんそくをして一所を見つめていた目に敷き畳の奥のほうの少し上がっている所を発見した。試みにそこを上げてみると、昨日の手紙は下にはさまれてあつた。うれしくも思われまたばかばかしくも夕霧は思つた。微笑をしながら読んでみると、それは苦しい複雑な心を重態の病人が伝えているものであつたから、大将の鼓動は急に高くなつて、自分がしいて結合を遂げたものとして書かれてあると思うと氣の毒で心苦しくて、第二の夜の昨夜に自分の行かなかつたことでどんなに御息所みやすどころは煩悶はんもんしたことであろう、今日さえまだ手紙が送つてないということおつとは、新婚の良人としていへばきわめて無情な態度である。露骨に言わずに自分の行くのを促してある消息を受けていながら、自分を待ちつけることがしまいまでできずに今朝になつたのであつたかと思うと、大将は妻が恨めしくも憎くも思われた。無法なこ

とをして大事な手紙を隠させるようなしぐさも皆自分がつけさせたわがままな癖であると思ふと、自分自身にすら反感を覚えて泣きたい気がした。これからすぐに行こうと夕霧は思ふのであつたが、たやすく宮は逢あおうとなされないであろうといふことは予想されることであつたし、妻はこうして昨日から嫉妬しつとをし続けているのであるし、それに今日が坎かん日にあたることはもし宮のお心が解けた場合を考えると、永久に幸福を得なければならぬ結婚の最初に避けなければならぬことでもあるからと、まじめな性格からは、恋しい方との将来に不安がないように慎重に事をすべきであると考えられて、行くことはおいて、まず御息所への返事を書いた。

珍しいお手紙を拝見いたしましたことは、御病氣をお案じ申し上げるほうから申しても非常にうれしいことでしたが、おとがめを受けましたことにつきましては何かお聞き違えになつたのではないかと思われるのでございます。

秋の野の草の繁みは分けしかど仮寝の枕結まくらびやはせし

弁明をいたしますのもおかしゅうございますが、宮様に対して御想像なさいますような

無礼を申し上げた私では決してごさいません。

という文ふみである。宮へは長い手紙を書いた。そして夕霧は厩うまやの中の駿しゅんそく足の馬くらに鞍くらを置かせて、一昨夜の五位の男を小野へ使いに出すことにした。

「昨夜から六条院に御用があつて行つていて、今帰つたばかりだと申してくれ」
大將は山莊へ行つてからのことであらういろいろに注意を与えた。

小野の御息所は、昨夜は夕霧の来ないらしいことに気がもまれて、あとの評判になつては不名誉であろうこともはばかられずに、促すような手紙も書いたのに、その返事すら送られなかつたことに失望をしていてそのままの今日さえも暮れてきたことに煩悶を多く覚えて、やや軽くなつたふうであつた容体がまた非常に險悪なものになつてきた。かえつて宮御自身は御息所の思い悩む点を何ともお思ひになるわけはなくて、ただ異性の他人をあれほどまでも近づかせたことが残念に思われる自分であつて、彼の愛の厚薄は念頭にも置いていないにもかかわらず、それを一大事として母君が煩悶していると、恥ずかしくも苦しくも思召されて、母君ながらそのことはお話しになることもできずに、ただ平生よりも羞しゆうち恥ちを多くお感じになるふうの見える宮を、御息所は心苦しく思い、この上にまた多くの苦勞をお積みにならねばなるまいと、悲しさに胸のふさがる思いをした。

「今さらお小言らしいことは申したくないのでございますが、それも運命とは申しながら、異性に対する御認識が不足してしまいましたために、人がどう批難をいたすかしれませんが、ことが起こってしまいましたのですよ。それは取り返されることではございませんが、これからはそうしたことによく御注意をなさいます。つまらぬ私でございますが、今までは御保護の役を勤めましたが、もうあなた様はいろいろな御経験をお積みになりました、お一人立ちにおなりになりましたとしても充分なように思つて、私は安心していたのでございますよ。けれどもまだ実際はそうした御幼稚らしいところがあつて、隙をお見せになつたのかと思ひますと、御後見のために私はもう少し生きていたい気がいたします。普通の女でも貴族階級の人は再婚して二人めの良人おとこを持つことをあさはかなことに人は見ているのでございますから、まして尊貴な内親王様であなはいらつしやるのでございますから、あそばすならすぐれた結婚をなさらなければならなかつたのでございますが、以前の御縁組みの場合にも、私はあなた様の最上の御良人ごりょうじんとあの方を見ることができません、御賛成申さなかつたのですが、前生のお約束事だったのでしようか、院の陛下がお乗り気になりまして許容をあそばす御意志をあちらの大臣へまずもつてお示しになつたものですから、私一人が御反対をいたし続けるのもいかがかと思ひまして、負けてしまいましたのですが、

予想してすでに御幸福なように思われませんでしたことは皆そのとおりでお気の毒なあなた様にしてしまいましたことを、私自身の過失ではないのですが、天を仰いで歎息たんそくしておりました。その上また今度のことでございます。あの方のためにも、あなた様のためにも、これは世間が騒ぐはずのことですから、どんなに堪えがたい誹謗ひぼうの声を忍ばなければならぬかしれませんが、しかしそれはしいて忘れることにいたしましても、あの人の愛情さえ深ければながい月日のうちには見よいことにもなろうかと、私はしいて思おうとするのですが、まったく冷淡な人でございますね」

と言いつつ御息所は泣くのであった。あつた事実と独断してこう言うのを、御弁明あそばすこともおできにならない宮が、ただ泣いておいでになる御様子は、おおようで可憐かれんなものであった。御息所はじつと宮をながめながら、

「あなたはどこが人より悪いのでしょうか。そんなことは絶対がない。何という運命でこうした御不幸な目にばかりおあいになるのだろう」

などと言っているうちに御息所の容体は最悪なものになっていった。物怪もののけなどというものもこうした弱り目に暴虐をするものであるから、御息所の呼吸はにわかにとまって、身体からだは冷え入るばかりになった。律師もあわてて願がんなどを立て、祈禱きとうに大声を放っている

のである。御みほとけ仏に約して、自身の生存する最後の時まで下山せず寺にこもると立てた堅い決心をひるがえして、この人を助けようとする自分の祈禱が効を奏せず失敗して山へ帰るほど不名誉なことではなくて、その場合には御仏さえも恨むであろうことを言葉にして祈つていたのである。宮が泣き惑うておいでになるのもごもつともなことに思われた。

この騒ぎの中で、大将の消息が来たという者の声を、御息所はほのかに聞いてそれでは今夜も来ないのであらうと思つた。情けないことである、こうした恥ずかしい名を宮はまたお受けになるのであらう、自分までがなぜ受け入れるふうな手紙などを書いてやったのであらうと悶もだえるうちに御息所の命は終わった。悲しいことである。昔から物怪のためにたびたび大病をしてもうだめなように見えたこともおりあつたのであるから、また物怪が一時的に絶息をさせたのかもしれないと僧しゆうえんたちは加か持じに力を入れたのであるが、今度はもう何の望みもなく終しゆうえん焉んの体ていはいちじるしかった。宮はともに死にたいと思召す御様子でじつと母君の遺骸いがいに身を寄せておいでになつた。女房たちがおそばに来て、

「もういたしかたがございません。そんなにお悲しみになりました、お死になつた方がお帰りになるものでございます。お慕いになりましたもあなた様のお思いが通るものでもございせん」

とわかりきった生死の別れをお説きして、

「こうしておいであそばすことは非常によろしくないことでございます。お亡かくれになりました方をお迷わせることになりますから、あちらへおいであそばせ」

お引き立て申して行くこうとするのであるが、宮のお身体からだはすくんでしまつて御自身の思召すようにもならないのであつた。祈祷の壇をこわして僧たちは立ち去る用意をしていた。少数の者だけはあとへ残るであろうが、そうしたことも心細く思われた。ほうぼうから弔問の使いが来た。いつの間にかと思われるほどである。夕霧の大將は非常に驚いてさつそく使いを立てた。六条院からも太政大臣家からも来た。ひっきりなしにそうした使いが来るのである。御寺みでらの院もお聞きになつて、御愛情のこもつたお手紙を宮へお書きになつた。この御消息が参つたことによつて、悲しみにおぼれておいでになつた宮もはじめて頭つむりをお上げになつたのであつた。

いつかから病気がだいぶ重いということは聞いていましたが、平生から弱い人だつたために、つい怠つて尋ねてあげることもしませんでした。故人の死をいたむことはむろんですが、あなたがどんなに悲しんでおられるだろうと、それを最も私は心苦しく思います。死はだれも免れないものであるからという道理を思つて心を平静にしなさい。

とあつた。宮は涙でお目もよく見えないのであるが、このお返事だけはお書きになつた。平生からすぐに遺骸いがいは火葬にするようにと御息所みやすどころは遺言してあつたので、葬儀は今日のうちにすることになつて、故人の甥おいのやまとのかみ大和守である人が万端の世話をしていた。亡骸なきがらだけでもせめて見て見たいと宮はお惜しみになるのであつたが、そうしたところではかたのなないことであると皆が申し上げて、入棺などのことをしている騒ぎの最中に左大将は来た。

「今日弔問に行つておかないでは、あとは皆、そうしたことに私の携われない曆になつて
いるから」

などと、表面は言つて、心の中では宮のお悲しみが悲しく想像され、少しでも早く小野へ行きたく思っているのに、

「そんなにまですぐにお駆けつけになるほどの御関係でもないではございませんか」

と家従たちが諫めるのを退けて出して来たのである。しかも遠距離ですぐにも行き着くことのできない道は夕霧をますます悲しませたのであつた。山莊は凄惨せいさんの氣に満ちていた。最後の式の行なわれる所は仕切りで隠して人々は例の西の縁側のほうへ大将にまわつてもらつた。

妻戸の前の縁側によりかかつて夕霧は女房を呼び出したが、だれも皆平静な気持ちでいる者はないのである。大将が来たことで少し慰められるところがあつて少将が応接に出た。夕霧も急にものは言えないのであつた。すぐ泣くふうの人ではないのであるが、ここの悲しい空気に人々の様子も想像されて無常の世の道理も自身に近い人の上に実証されたことにひどく心を打たれているのである。ややしばらくして、

「少しおよろしいように伺つたものですから、安心していたのですが、何たることが起つたのでしよう。どんな悪夢でもさめる時はあるのですが、これはそうした希望も持てませんことを悲しく思います」

と宮への御挨拶あいさつを申し入れた。御息所が煩悶はんもんしていたことをお思いになつて、大将が原因で免れがたい運命とはいえ母君はお亡なくなりになつたとお思いになると、恨めしい因縁の人の弔問に宮はお返辞すらあそばさない。

「どう仰せられますと申し上げればよろしゅうございました。重いお身柄をお忘れになつてすぐにこの遠い所をお弔くやみにおいでくださいました御好意を無視あそばすようなお扱あつかいもあまりでございましょうから」

女房が口々に言うど、

「いいかげんに言っておくがいい。何を何と言っていていいか今はそんなこともわからない」
宮がこう言つて横になつておしまいになつたのももつともなこの場合のことであつたら、女房が、

「ただ今のところ宮様はお亡れかくになつた方同然でいらつしやいます。おいでくださいませしたことは申し上げておきました」

と夕霧へ言つた。この人たちは涙にむせかえつているのであるから、

「何とも申し上げようのないことですから、私の心も少し落ち着き、宮様の御気分もお静まりになつたところにまた参りましょう。どうしてそんな急変が来たのか、私はその理由だけを知りたい」

と大将は女房に言つた。露骨には言わないが少将は御息所の煩悶した一昼夜のことを少し夕霧に知らせて、

「そう申してまいればお恨み言になつていけません。今日は頭が混乱しておりますして間違つてお話し申し上げることがあるかもしれません。それでは宮様のお悲しみもいずればおあきらめにならなければならぬことでございますから、御気分のお落ち着きになりますところにまたおいでくださいませ」

と言った。その人たちも気を顛倒てんとうさせている様子を見ては、大将も言いたいことが口から出ない。

「私の心なども暗闇まっくらになったように思われるのですから、宮様としてはごもつともです。極力お慰め申し上げて、あなたがたの力で今後少しのお返事でもいただけるように計らってください」

などと言いおいて、長い立ち話をしていることもさすがに出入りの人の多い今日の山荘では軽々しく見られることであろうとはばかりして大将は帰ることにした。今夜のうちに済ませるために納棺その他のことを着々進行させている物音にも、盛大ならぬ葬儀の悲哀が感ぜられて、大将はこの近くにある自家の莊園から侍たちを招いて、いろいろな役を分担して助けることを命じていった。急なことであったから自然簡単に済ませることになった葬儀が、これによって外見をきわめてよくすることができるようになった。大和守やまとのかみも、「すべて殿様のありがたい御親切のおかげでございます」

と感謝していた。

母君を何も残らぬ無にしておしまいになったことで、宮は伏し転まろんで悲しんでおいでになった。親は子にこのかたがたのような片時離れぬ習慣はつけておくべきでないと思ひ、

宮のこの御状態を女房たちはまた歎き合つた。大和守が葬儀の跡の始末を皆してから、「こんなふうになさいまして、まだながく寂しい山荘においでになることは御無理です。いつそうお悲しみが紛れないことになりましょう」

などと宮へ申し上げるのであつたが、宮は母君の煙におなりになつた場所にせめて近くおほしめいたいと思召す心から、このままここへ永住あそばすお考えを持つておいでになつた。

忌中だけこもつてゐる僧たちは東の座敷からそちらの廊の座敷、下屋しもやまでを使つて、わずかな仕切りをして住んでいた。西の端の座敷を急ごしらえの居間にして宮はおいでになるのである。朝になることも夜になることも宮は忘れておいでになるうちに日がたつて九月になつた。山おろしがはげ烈しくなり、もう葉のない枝は防風林でも皆なくなつた。寂しさの身にしむこの季節のことであるから、空の色にも悲しみが誘われて、宮は歎なげきを続けておいでになる。命さえも思うどおりにならぬと悲しんでおいでになるのであつた。女房たちも二重三重に悲しみをするばかりである。夕霧からは毎日のようにお見舞いの手紙が送られた。寂しい念仏僧を喜ばせるに足るような物もしばしば贈られた。宮へは真心の見える手紙を次々にお送りして、自分の恋に対して御冷淡である恨みを語るほかには、今も御息所の死を悲しむ真情を言い続けた消息であつた。しかも宮はそれらを手に取つてながめよ

うともあそばさないのである。あのいまわしかつた事件を、衰弱しきつた病体で御息所は確かに悲しみもだえて死んだことをお思いになると、そのことが母君の後世ごせの妨げにもなつたような気があそばされて、悲しさが胸に詰まるほどにも思召されるのであるから、大將に触れたことを言うと、その人を恨めしく思召してお泣きになるのを見て、女房たちも手の出しようがないのである。一行のお返事さえ得られないのを、初めの間は悲しみにおぼれておいでになるからであろうと大將は解釈していたが、今に至るも同じことであるのを見ては、どんな悲しみにも際限はあるはずであるのに、今になつてもまだ自分の音信たよりに取り合わぬ態度をお続けになるのはどうしたことであろう、あまりに人情がおわかりにならぬと恨めしがるようになった。関係もないことをただ文学的につづり、花とか蝶ちようとか言っているのであつたなら、冷眼に御覧になることもやむをえないことであるが、自身の悲しいことに同情して音信たよりをする人には、親しみを覚えていただけるわけではないか、祖母の大宮がお亡かくれになつて、自分が非常に悲しんでいる時に、太政大臣はそれほどにも思わないで、だれも経験しなければならぬ尊親の死であるというふうに見えて、儀式がかつたことだけを派手はでに行なつて万事おわ了るといふ様子であつたのに、自分は反感を感じたものだし、かえつて昔の婿でおありになつた六条院が懇切に身を入れてあとの仏事のことなど

をいろいろとあそばされたのに感激したものである。これは自分の父であるというだけで思つたことではない、その時に故人の柏木かしわぎが自分は好きになつたのである。静かな性質で人情のよくわかる彼は、自分と同じように祖母の宮の死を深く悲しんでいたのに心を惹かれたものであつた。この宮は何という感受性の乏しいお心なのであろうと、こんなことを毎日思い続けていた。夫人は山荘の宮と大将の關係はどうなつていたのであろう、御息所とは始終手紙の往復をしていたようであるがと腑ふに落ちず思つて、夕方空にながめ入つて物思いをしている良人の所へ、若君に短い手紙を持たせてやつた。ちよつとした紙の端なのである。

哀れをもいかに知りてか慰めん在るや恋しき無きや悲しき

どちらだか私にはわからないのですから。

夕霧は微笑しながら嫉妬しつとが夫人にいろいろなことを言わせるものであると思つた。御息所を対象にしていたらうとはあまりにも不似合いな忬度そんたくであると思つたのである。すぐに返事を書いたが、それは実際問題を避けた無事なものである。

何れとも分きて眺めん消えかへる露も草葉の上と見ぬ世に

人生のことがことごとく悲しい。

まだこんなふうに隠しだてをされるのであるかと、人生の悲しみはさしおいて夫人は歎いた。

青空文庫情報

底本：「全訳源氏物語 中巻」角川文庫、角川書店

1971（昭和46）年11月30日改版初版発行

1994（平成6）年6月15日39版発行

※このファイルは、古典総合研究所 (<http://www.genji.co.jp/>) で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

※校正には、2002（平成14）年1月15日4版を使用しました。

入力：上田英代

校正：柳沢成雄

2003年5月16日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

源氏物語

夕霧一

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

著者 紫式部

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>